



所在地 藤沢市藤沢 630-1

建物概要 (主屋) 木造2階建
(外蔵・内蔵) 蔵造り

建築年 昭和6年(1931)頃
※主屋、外蔵、内蔵共

設計・施工 不明

交通 JR 藤沢駅北口より徒
歩5分

JR 藤沢駅北口から5分ほどのところにある蔵まえギャラリーは、昭和6年(1931)頃に建てられた旧榎本米穀店の店舗兼住宅と内蔵を活用して運営されています。人間でいえば今年、米寿を迎えます。

藤沢は古い歴史を持ち、中世には遊行寺の門前町として、近世には宿場町として栄えましたが、明治5年(1872)の宿駅制廃止と明治20年(1887)の鉄道の開通により、相模一帯の農業と結びついて肥料商や米穀の集荷商が集まる県央一の商業地に変化しました。

明治13年(1880)の大火をきっかけに、土蔵造りの店舗(店蔵)や袖蔵など防火対策が進みましたが、大正12年(1923)の関東大震災で大きな被害を受け、現存する町家のほとんどは震災後のものです。

旧東海道から分岐して江の島へ向かう道(江の島道)沿いに旧榎本米穀店があります。この辺りは蔵前という地名が残っており、近くの境川の舟運で米穀の集荷が盛んだったことが窺えます。震災後の建物であることから、屋根は銅板葺きで軽くし、防火上の観点から店舗の両袖に米蔵と内蔵を配しています。

内蔵は伝統的な土蔵造りではなく、鉄筋コンクリート造の基礎に土台を回し、木造の軸組に木摺下地(斜め張り)、防水紙にラスモルタルという近代的工法を採用しています。

一方主屋は木舞下地の土壁塗りの伝統的な造りながら、小屋組にはトラスが使われ、壁には大筋違が見られるなど、震災の教訓が生かされています。4間半間口、出桁造りの2階に1階は下屋庇を設けて店舗入り口は8枚の硝子戸で、開放的になっています。広い土間に帳場、金庫、神棚と商家の要素が全てそろっており、大黒柱等主要な部材は全てケヤキを用い、江戸以来の伝統的な商家の姿を受け継いでいます。住居部分は10畳と8畳の二間続きの座敷に床の間、書院を備え、猫間障子や千本格子の障子が目を惹きます。欄間の自然木、便所や風呂場の天井など、さりげなく手が込んでおり、目を楽しませてくれます。2階は来客用の和室でしたが、増築と改修がされて洋室と台所になっています。

米蔵には山一(やまいち)の屋号が見え、入口は石造アーチになっているのが見どころで、現在は車庫として使われています。蔵の外壁はどちらも左官仕上げで目地切りをして石積み風になっています。

(2018年9月現在)

Gallery

写真右 帳場の神棚と金庫

写真中 8畳の座敷

写真下 便所と浴室の天井

